

## 会員の広場



### ベネチアのマスク

濱田 義文（東京）

閑居して断捨離をなす。思わぬかたちで時間ができたので、いままで撮りためたビデオを整理していると、ミラノに滞在していたころの一篇を見つけ、懐かしく再生してみた。

ミラノの中央駅からベネチア行の電車に乗りこむと、中世風のきらびやかな服装をした

人たちが目につく。終点サンタ・ルチーア駅からヴァボレットにゆられ、サンマルコ広場に着くと仮面をつけた人たちが溢れていた。王侯貴族のコスチュームで誇らしげに練り歩き、写真撮影には喜んで応じてくれた。鳥の嘴のようなマスクで、つば広帽子をかぶり、黒いガウンをまとい、手袋をして木の杖を持つベスト医師の扮装が異彩を放っていた。一七世紀ベストが蔓延したとき感染から身を護りながら治療した医師の服装である。

今年二月に始まったカーニバルは、新型コロナウイルスのため二日を残して突然終幕となった。その後都市封鎖となり、街から人影が消えた。五月の初め外出規制は緩和されたものの、マスクの着用が義務づけられた。こ

の間イタリアでの死者数は三万人を突破した。わが国も、四月の初めに緊急事態宣言が発表され、外出自粛が要請された。五月の半ばに概ね解除されたのだが、その時の日本の死者数は七〇〇人を幾分越えるほどであった。日伊の著しい差は何なのだろうか。文化に根ざした行動様式の差違なのだろうか。

パンデミックは、人類の歴史のなかで度々繰り返されてきた。近代になって、厄災の原因となる感染症の病原体をつきとめた。未知は恐怖だが、既知となれば過度に恐れる必要はない。コロナウイルスもその特性が解明されてきたからには、時を経ずして治療方法が見出され、季節性インフルエンザ並になるだろう。しかし死に至る病としてはいけない。

死といえば、日本では感染症の死者より自殺者（年間二万人）の方が多い。自殺は景気動向と相関性があるという。「有事」を体験すると、医療や制度、政策の綻びに気づくのだが、何気ない日々の暮しの有難さを身をもって知る。ライフラインを支えてくれる人たちに對し、感謝の気持ちが自ずと溢れてくる。

友人からビデオ・メッセージが届いた。クレモナの病院の屋上で、長い髪の若い日本人がバイオリンを奏でている。その癒しの調べに、マスクをつけた防護服姿の医師・看護師らが、バルコニーや隔離のための白いテント脇にたたずみ、聴き入っている。夕陽にそめられた鐘楼にバイオリンストの赤いドレスが映え、歓声と拍手がわき上がった。